

心の輪13R



『夜のくだもの屋』という資料を通して、 「心のあたたかさ」について考えました！



☆「あかり」の数は？

この物語には、いくつの「あかり」が出てくるのだろうか？◆くだもの屋さんのお店の「あかり」。
◆毎日夜道を帰っていく少女を気遣って、店のあかりを消さずにいようと言いだした店のご主人の心。
◆この意見に賛成した奥さんの温かさ。
◆毎日くだもの屋の前を通るときに、そっと感謝する少女の思い。
◆少女のお父さんの感謝の気持ち。他にもたくさんあるかもしれない。

この話を読んで、人のためにさりげなく行っていることをしている人がいたなと感じて、その人を見習おうと思った。自分にも出来るんじゃないかと感じた。

自分が知らない所で、みんなのために行動している人がたくさんいることを知って、あたたかい気持ちになった。私もみんなのためになるような行動ができるようになりたい。

今日習ったおじさんとおばさんのように、優しく温かい人になりたいです。また、僕は助けられたことの方が多いので、助ける側になって、たくさんの人のためになりたいです。

自分が知らないところでたくさんの人が助けてくれていることがあるかもしれないので、感謝していきたいと思います。また、自分も進んでイスを上げたり、気を遣ったりして動きたいです。

「あかり」も温いけど、人の思い（気持ち）の温かさは、人の心を安心させてくれる力を持っている。だから、もっと温かい気持ちを持つ人が増えれば、みんな安心して心も温かくなる。

私がこの時間で学んだことは、自分のためだけに何かしてくれている人は必ずいるということ。自分が大変だったときに助けてくれたり、何かしてくれたりする人がいるから、誰かが大変だったり困ったりしたときには、何かして『あかり』が灯せるようにしたい。

ある大雪の日

雪の多い年のこと。豪雪にみまわれたある日。
鉄道は不通になり、通行止めの道路は立ち往生の車が数珠つなぎ。
そんな中でみつけた、一期一会、心のふれあいの風景。

おにぎり
住民から差し出されたおにぎりを、ドライパーが窓越しに受け取る。「名前は」と何人も尋ねたが、住民たちは「なんも、いいってば」とかわし、長く伸びた車列を縫って、おにぎりとお茶漬物を配り歩いた。四日深夜からの記録的な大雪で、翌五日夕まで通行止めが続いた八郎湯町真坂の国道7号での出来事。

「腹の足しに」とおにぎりを廻りだすと、夫に「それじゃあ足りない」と言われた。外に出ると南北に長い車の列。お向かいさんにも声を掛けて米を炊き、夫らとおにぎりを配った。車内の女性には家のトイレを使うよう申し出た。

その一週間後、町役場にお私の電話があった。ラジオでも話題にされた。主婦らは、町から「広報紙に顔写真を載せたい」と頼まれたが、断るつもり。当方も同様のお断りをしたが、「自分たちも気持ちよかったんだから、いかつい顔の男性が車から降りて、何度も頭を下げてくれたし」と笑ってかわされた。最初におにぎりを配った主婦は「一緒に炊き出ししてくれた人が近所にいたことがうれしい」と話した。多数の犠牲者が出ている今冬の豪雪だが、その隙にこんな話もある。

（秋田県新巻 真坂町を走る、国道7号）

『中学生の道徳1 自分を見つめる』
(出版：あかつき) P.89より引用